

東京港巡検

山本貴子

全国に様々な被害をもたらした台風も去り、やっと穏やかな秋の季節を迎えたころ、千歳先生の御指導による東京港巡検が行われた。

10月30日、集合場所は、東京港視察船「新東京丸」乗船場だった。私たちは、まず、東京港全体を見るために「新東京丸」に乗り込んだ。東京港の区域は、東京湾の一番奥にあり、荒川河口から多摩川河口の間の定められたところである。東京湾には、横浜港など、他にも大きな港があるが、東京港は、昭和40年代の輸送革新に、いち早く対応し、コンテナ埠頭、フェリー埠頭、物資別専門埠頭など、時代の新しい要請にこたえる最新鋭の港湾施設を積極的に整備し、海上輸送の今日的課題にこたえてきたのである。そして、現在では、世界各地とコンテナ定期航路のネットワークによって結ばれ、首都圏の重要な貿易拠点になっている。東京港の役割としては、大きく分けて、港湾機能と都市機能がある。その両機能が、実際に形として存在しているのを見て、私自身が興味を持ったのは、後者の方だったので、東京港の都市機能について述べたいと思う。

東京港では、現在までで、2,731ヘクタールの埋立地を造成している。これらの埋立地には、清掃工場や下水処理場、汚泥処理プラント、火力発電所、新幹線車両基地、住宅団地、公園、市場などが立地している。また、ゴルフ場などのレクリエーション施設の整備も進められている。これらの埋立地のうちの約3分の2は未開発で、今後、港湾設備や臨海副都心の建設、公園の整備などの用地として使われる予定になっている。

東京港の将来計画として、臨海副都心「東京レポートタウン」というのがある。東京レポートタウンは、東京の都市構造を一点集中型から多心型へと転換させるとともに、国際化・情報化という時代の要請に的確にこたえることのできる未来型副都心を臨海部に創造しようというものである。建設の第一段階では、東京港連絡橋や新交通システムなど、主要な都市基盤施設を完成させるほか、「国際展示場」や「テレコムセンター」など

の文化と情報、そして人々の国際交流の拠点となる中核施設を建設する計画である。さらに、生活基盤の整備と連動させながら住宅の建設を進めていく。

ここまで述べてきたことは、「新東京丸」の船上で、ミスポートのきれいなお姉さんが説明してくれたことである。海は、やや風が強く、船の揺れも激しかったため、東京港を一周し終わるころには船酔いしてしまった人もいたようだ。東京港の視察を終え、一旦解散し、私たちは次の訪問地である新東京都庁舎へと向かった。

新しく東京の「顔」となった新東京都庁舎は、一步足を踏み入れると、そこは氷の街のような冷たい印象を私たちに与えた。ここでは、東京都港湾局の方に東京港の概況や問題点についてお話を伺った。

東京港では、消費物資中心の貨物を主に扱っていて、原油を扱っていないところがその大きな特徴といえる。また、値の高い貨物を多く扱っているため、取り扱っている貨物の値段は、全国で第1位であり、貨物中の4分の1は外国貿易によるものだそうだ。私は、東京港は、港としては、横浜港や神戸港に比べて、地味なイメージを持っていたので、お話を伺って驚くことばかりだった。お話の最後に、問題点について伺った。予想通り、一番の問題は埋め立てに関わるものであった。埋め立てには限界があり、水の流れが悪くなり、汚れ、その結果、水温が上がったり、土地の上で熱の発生量が違うためにヒートアイランド化するなどといった環境問題がある。その他にも、ゴミの汚水が海に流れるのを防ぐための頑丈な護岸をつくるのに、莫大な費用がかかることや、地盤の問題などがある。

ちょっとオーバーかもしれないが、私は今回の巡検で「東京」を知ったような気がする。私なりに得たものは、とても大きなものだったし、大変楽しく、有意義な秋の一日だった。

(10月30日 千歳教官指導)